



卒業に向けて

3月を目の前にして、進級、進学に伴って「別れ」の季節が近づいてきています。人生には別れがつきものですから、進級や進学を通して、子どもたちも「別れ」というものを学んでいきます。

今朝(24日)、5年生の子供たちを中心に、体育館にひな壇を設置しました。ひな壇設置が始まると、いよいよ学校の最大の行事である卒業式の練習が行われるようになります。また6年生のために、5年生が貢献することを通して「別れ」に向き



合い、6年生は、自分たちの卒業式であるという思いをもつことで「別れ」への実感を持ちます。5年生としては、初めて6年生のための行事(もちろん在校生が参加する目的はありますが)に参加することになります。5年生にとっては、卒業式を「👁️ 帯西イエロー」の心を通して「自己有用感(人に役立つ)」を高める場として、次年度の意欲に繋げて欲しいと思います。また、6年生にとっては、下級生や先生方の思いを感じ、「👁️ 帯西グリーン」の「ありがとう」の思いを胸に式に臨み、「👁️ 帯西ブルー」の「感動する心」を味わって人生の節目として欲しいと思います。

暮らしやすい社会とは

私たちの周りには生き辛さを感じている方々がたくさんいらっしゃいます。車椅子や杖をついている人は、歩くことが不自由なのだろうと想像します。また、白い杖をついたり、盲導犬を連れていたりする人は、目が不自由なのだろうと想像できます。しかし、聞こえにくかったり病気であったりと外見だけではわからない場合は、どんな障害があるかわからないことがあります。

内閣府が出している障害者白書(2019年)によると、人口1000人当たり、身体障害者は34人、知的障害者は9人、精神障害者は33人いるそうです。複数の障害がある人もいるので単純計算はできませんが、国民のおよそ7.6%が何らかの障害があるといます。これは30人学級だと2人程度いるということになります。

私は以前、車椅子に乗って熊本市街地を移動しながら様々な体験をしました。2階にあり階段しかない美味しそうなパスタ屋さん、高低差があるバスの昇降口、段差がある歩道等、たくさんの課題が山積していました。その体験活動の主催者は、この不自由さ(バリア)は「歩けない、見えない人たちが等が利用することを想定しない状況をつくり出してしまった『社会』の側にあるんですよ。不自由を感じたらまずは周りに声をかけましょう」と言われていました。障害の有る人も、無い人もそれぞれの特性は多様です。まずは、コミュニケーションを取ることで、サポートが必要なのか、必要な場合どのようなサポートを求めているのかを聞くことが必要だと感じました。